

# 第二の人生 アルターエ ゴになる

Mr. x o p o ш o

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死んだある青年は生きたいと願った。

その時に己を拾った存在は……

## 注意事項

文を書く力はほぼ主にはありません。書きたいと思っただけなので続くかも分

からない見切り発車なモノですがなるべくストーリーなど読んで頑張ろうと思います。  
また間違ってる点などあれば教えてもらえると嬉しいです

これは生きたいと願った青年の物語

# 目次

プロローグ	1
第1話	8

# プロローグ

## プロローグ

ああ、俺は死んだのか

どうやって死んだかすら覚えていない。

ここがどこなのか……天国？

天国なんて優しいところじゃないだろう

だってここは”真つ暗でなにもない深海のような場所”なんだから

なにもできない

ただ沈むようにその身をその場に委ねるしかできない

正直、死んだことを認めたくなかった。ああ、少なくとも早死した俺にとってはまだ

まだ人生を謳歌したかった。生きたかったなあ……

『その願いこの私が叶えてやろう』

何だこの声

突然、声が聞こえたと思つたら俺の目の前にこの暗い深海を照らすかのように強く放たれる光。現れた光は俺へところ放つた

『その生への執着、人間よ。お前は生きたいか』

そもそも人つてのは生に執着した獣だろうが。生きたいと思つて何が悪い。俺だつて死にたくて死んだんじゃないんだ。まあ少なくとも死んだ瞬間の記憶すら俺はわからないまま死んだがな

『ならば選ぶがいい。第2の生へ得る代わり、私の”使徒”となり、私の命を果たせ』  
ようは蘇らせてやるからあんたの命令通りに動けつてか……

俺に出来ることならなんだつてしてやるさ、まあ俺に出来ることなんて少ないだろうがな。雑用係にでもしてくれ。

『いま契約は交わされた。ではキミをこの世に降ろそう』

そう言うのと目の前の光はより強くなり、俺を包み込む

最後に俺はこの声の主の名を聞こうとした。神というのだから大きいのだろうか

名前を聞こうとしたがそれよりも先に辺りは真つ白な世界へと変わる

そして俺はそこに立っていた

地に足が着いている。手足は動く顔も、どうやら俺は本当に第2の生つてのを得たらしい。はは、これが蘇生つてやつか……神つてのも大層なことができるんだな。

俺は笑いそうになりながらも自分の後ろに気配を感じたため俺はそちらへと振り向く。

そこにはたった一人女性が居た。

真つ白な肌にシルバーの髪色、それにあつた青の装飾品など……俺はそれを見ても  
”人ではない”というのが分かった

いや直感だ。

俺とは別の……人の形をした”ナニカ”なんだということに……

ただ目が合う。互いになにも語らず俺を見るとその女性は目を細めてただその場からまるでそこに存在していなかったかのように消えていった

「……………なんだっただ」

俺は先程の女性について考えようとした。

だが考える時間も与えてくれず、この真っ白な世界の空にヒビが入り、ゆつくりと崩壊していく

どうやら目覚めの時らしい……さて、崩壊の中、俺はこの非現実的なことが起きすぎて訳が分からなくなっているがある程度は受け入れよう。神様直々のお願いだ。意外と受けても悪くないかもしれない……なんてそんなふざけたことを考えながら俺はその崩壊に身を委ねるように目を瞑るのであった



「ん……………」

目を開く。

自分の身体を見る。ああ、生き返ったんだな俺……

すげえ。さすが神様だ。こんなことも出来てしまうなん「目覚めたかね……少年」

「あんた誰だ。」

俺が目を覚ませばそこには深い藍色の法衣を着た神父。

いん？ って待って待ってこの姿……………おいおいおいおいおいおいおいおいおいおいお  
い!?!?

「ここでは名を伏せておくがこの身体の名を使うとしよう」

まさかここはいやありえない!?でも俺はその目の前の男の姿に見覚えがあった。

かつて前世において俺の知るこの声、そして顔立ちその立ち方、全てにおいて忘れ去ることの無い存在の一人とされる人物……

「私の名は言峰綺礼。同じ”異星の神の使徒”同士よろしく頼むよ……」

oh……俺、主人公たちの敵になっちゃったよ

てかこころfgoの世界かよ…

# 第1話

転生して俺は fate / grand order の世界において異星の神によって  
召喚された

そして俺がこうしてここに召喚されたってことはいずれは藤丸立香達の前に立ち  
だかる壁となる存在になるのだろう。

ある程度、現状はいま俺の目の前を歩いている言峰綺礼ことラスプーチンが語って  
くれた

異星の神によって蘇生された7人のマスター

それぞれが7つの異聞帯を持ち、その異聞帯に存在する空想樹を育てあげ  
異星の神の降臨の為のモノになることを……

だがみながもう分かりきっている。いずれ空想樹たるモノはキリシユタリアの異聞  
帯……いま俺が地に足が着いているこのギリシャの異聞帯が召喚の儀式の場になること  
を……

「君はこうして異星の神の使徒となり、私達は共に神の降臨を待つ者として協力しようではないか」

「……………本来ならこんな形で協力関係になるなんては思わなかったけど、そう契約した以上は俺も身体を動かすしかねえな」

正直、一プレイヤーとしてはこちらの立場に立って異星の神の降臨を待つのは恐ろしく感じる

これまでプレイヤーとして見てきた視点では少なくとも異星の神の降臨はここで降りることは決まっているが、いまの俺はこちら側である以上、主人公たちを倒すしかないだろう。

そして俺が言峰と共に向かう先に気配を感じる。

このとてつもなく広くでかい廊下。

そして外には蒼く広がった空……………ここがどこなのかは大方把握はしていた。

言峰は大扉の前まで来ると2回ノックし、「失礼する」と言うとその扉は自動的に開いた

「……………やっぱりか」

そこには円卓と7つの椅子の内、一つはある人物が座っていた

金髪ロングと細剣にも見える杖、白い装備が特徴の中性的な美青年。

「待っていたよ。新たなアルターエゴ」

「キリシユタリア・ヴォーダイム……」

「どうやら自己紹介は不要のようだね」

それもそうだ。

かつては……そう、敵だった存在であり、いまこうして円卓の席に着いているということはまだ立香達はこのオリュンポスに来ていないのだろう。

そして他の席には魔術映像越しに他のクリプターつまりAチームのみなが居るのであった

『それが新たなアルターエゴか？キリシユタリア……』

そうキリシユタリアに質問しながらこちらを睨むカドック

『キリシユタリア様の邪魔だけはしないように……異星の神の使徒はあまり信用出来ないもの』

そう言い、俺と言峰を警戒するオフエリア。これは酷いモノだ。少なくとも俺は言峰綺礼……いやいまはまだラスプーチンだったか、こいつと一緒にされるのはなんか嫌だが、この立ち位置に立ってしまった以上、仕方ないか

『……………私はなんでもいいわ。早く話を続きをしてくれない？』

そう言い、俺に目もくれない芥ヒナコ

『あら、いい顔してるわね。見た感じ”東洋人”っぽいかしら……素敵だわ♡』

ペペロンチーノ……あんたも……いやそれは言わない方がいいのか。

『へえ、異星の神様は新たに使徒を召喚したってか！どんな能力だよ！教えてくれ！』

こちらに興味津々なベリル。

少なくともその少年心のような目の中に隠れた殺気を抑えてくれ

『……………』

そして最後にこちらをただ見つめてくるデイビッド……

正直、一番怖いしなにか見透かされてるような気がしてならない

「定例会議の中失礼したクリプターの皆さん。だが異星の神の言葉によるこの者を降ろしたことを伝えるよう私にも来たことからこうしていま皆様が居る中、紹介させてもらいました。」

そう言い、言峰神父が俺の状況について説明してくれている。

俺はいまこの場に立っている。

異星の神に第二の生へを与えられ、その役目は異星の神を降ろすこと……いずれ主人公たち藤丸立香の前に立ちはだかる使徒……俺は未だに心の整理がついていなかった

だが時間は俺を待つてくれない。こうして契約を交わした以上俺はこちら側に立ち、そして立香達を排除する。ただそれだけの事だ。例え俺の中にあるこの英霊が汎人類史の英霊だとしても、この力を俺に授けた以上はとことん使わせてもらうぜ

そうしてあとは自分で紹介するようにと俺の前には居た言峰神父はその場を退き、俺に前に行くように目配せする

「いま言峰神父が説明してくれた通り、俺は新たに異星の神に召喚されたアルターエゴ。名を□□□□。いずれは異星の神を降ろす者としてこの力を振るわせてもらう。よろしく頼む」

それだけ伝える。過去の名など不必要だろう。いまこの身は英霊である以上、その英雄の名を語るだけの価値はあるはずだ。

「では我々もこれから行動をする為、今回は自己紹介のみということでは会議の中失礼した。では行こうか」

そう言い、言峰神父は礼をすると会議室を出ていき俺もそれに着いていく

「で言峰神父。これからどうするんだ？」

「神父でいいさ……これから君には私に着いてきてもらう。勿論、私の護衛役としてね」「その”カラダ”を持ってんなら俺が護る必要性はないに等しいと思うんだが？」



「ほう……この身体を持ち主を知っているふうに言うでは無いか。」

「いやなに、すこし知っているだけさ」

今はまだラスプーチンって訳か、少なくともロシアの異聞帯に行き、アナスタシアをツアーリにした時には彼の願いは叶い、いずれ本当の言峰綺礼となるのだろう。

「確かにこの者のカラダと私はよく馴染む。カラダの使い方も分かる以上、多少の無理な戦闘もできるさ……だが君は別格だろう?」

「おいおいそれは「いいや違うないさ」」

「その背中に背負う盾は何人足りとも貫くことを許さない盾であろう。」

「止せよ。俺は本人じゃねーんだ。使い方は頭に入ってもそれを使いこなせるかは別なんだからよ。まあ俺は護るのが専門みたいな所があるからな。そこら辺は任せな」

「ふっ……期待しているよ」

そうして俺たちはロシアの異聞帯へと向かうため、次に異星の神に仕える仲間、コヤンスカヤの元へ向かうのであった